夜死物語【The Death of One Thousand and One Nights】

スーブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千夜一夜死物語【The Death of One Thousand and One Nights】

【Nコード】

N1443Q

【作者名】

スーヴ

【あらすじ】

暗すぎる世界に絶望した少女は、永遠の古城で死を乞い続けた。

されど、少女は呪われた身。生後、白い肌に受けた千一の怨嗟は、決して彼女に死を許さない。

ゆえに彼女は死ねない。千一の死を楔ぐまで。

十字架「Sheherazade」は語る。千一の死の物語を。
全ては、少女に死をもたらすために。

はじめましょう。千夜一夜の死物語を。

【SCENARIO：A〜C】

A、

ステルヴェンの眩い森には古いお城があるというのが、昨今都で囁かれる専らの噂だ。

古城は人々をその悠然とした佇まいで誘い、中に招き入れるのだという。

城内は、一言で表現するのならば「楽園」で、あらゆる至福と快樂、悦樂に溢れかえっているのだそうだ。

城を訪れたものは、誰もがその夢のような世界に魅了される。

望むだけの世界を分け与えられ、望むだけの生を約束され、望むだけの欲求を満たされる。

そんな魔的な古城であったが、誰もが招かれるわけではない。招かれざるものには、古城は至極冷淡だ。その者の眼前にして、唐突に屋気楼のごとく姿を消してしまう。呆然とその神秘を見送り、落胆し、そして気づいた頃には周囲は霧に覆われていて、自分のもと来た道へ戻ることは叶わないという。

しかし、都の人々の中には、その危険を顧みず、自分こそが招かれし者だろうと信じて、古城を目指す者もいる。

勇んでステルヴェンの森へと入っていった者は、誰も帰らない。

楽園に辿りついた者は永遠を手にし、辿りつけなかった者は森を彷徨い、いずれの末路をたどるにせよ、帰ることはないからだ。

人々は思う。せめて、自身が招かれしものなのかそうでないのか分ければいいのに。だがそれは叶わぬ願望。望みを叶えるのならば、まずは古城にいかねばならない。

なればこそ、人々は自らが『選ばれし者』として選定される瞬間を、日々の営みの奥深くで待ち望み続けるのだ。

『選ばれし者』とは、古城自身が城内に招くべく選定した者のこ

とである。『選ばれし者』として選定されたものは、古城の使徒「闇の十字架」により、望む望まぬに関わらず連れ去られ、三夜を経て古城にたどり着くのだそうだ。

そうして、『選ばれし者』は他の招かれし者と同様に、永遠の全てを手に行うことができる。

A、

古城の噂は、辺境にある小さな村、アンファンヌにも響き渡っていた。

都の人々の古城への憧憬は並々ならぬものがあつたが、この村の人々は比較して冷めている。

古来より伝わる文化が其の地に深く根を張っており、異文化の入り込む隙のほとんどないのが、町の冷めの原因であるだろうことは疑う余地がないが、なによりも大きな原因は、村人がみな長寿であることだろう。

アンファンヌでは、根付いた文化によって、多くの人々が長寿を獲得していた。都の住人が五十そこそこで地に還るのに対して、年が三桁を越えるのはこの町では常であり、都の薄命な人々と比較して、『永遠』というものに執着しないのは頷けた。

さて、彼らに長生を約束する文化とはどのようなものなのだろうか。

アンファンヌでは、それを呪と呼ぶ。

村の中で右と左の瞳の色の違う子供が生まれたとき、村人はその子に呪を与える。血を模した朱色の顔料を壺いっぱい用意し、村人はそれを指ですくい、一人一人赤子の身体に塗っていく。そうすることで、体内の死を赤子に移し、村人は長寿を得るのだ。

朱塗れの子は、呪われた子だ。村人は呪塗りを終わると、その子を七日間十字架に磔にし、天日に晒した末、かわいたところで山に

捨てる。そうすることで、呪の儀式は終わりを迎えるのだ。

B、

少女に名はない。

彼女は生まれたばかりのときに磔にされたのだ。
アンファンヌ地方に伝わる呪の儀式の礎として。

少女に光はない。

視力など生後一週間で失った。

彼女の色の異なる濁った両目は、いつもあらぬ闇を見据えていた。

少女に死はない。

彼女は呪われし子だ。

死など、その昔破棄ステルほど浴びた。

A、

少女の最初の記憶は古城のソラだ。

天井のない、空のない、虚空ばかりを溢れんばかりに湛えたその
城は、少女には大きかった。

大きかったといえば、記憶の開始と同時に彼女に降り注いだステ
ンドグラスや、彼女を切り刻んだ魔黒い十字架、自身より零れ出る
ぬちゃりとした真赤な血だまり。そして両の掌にばかりと開いた穴
と、胸に刻み込まれた蛆ののたくったような朱色の紋様も大きかつ
た。

なにもかもが大きくて、自分はあまりにちつぽけだ。彼女がそのことを知りえるのには一秒と要さなかった。

「ああ、哀れな忌み子よ。残念だが、貴女そなたの願望を叶えることは出来ぬ」

魔黒い十字架は嘆いた。少女が城に選ばれて以来、息を吸うように繰り返している虐殺を終え、今日も相変わらずいつもと同じ台詞を述べたのだ。

魔黒に選択はない。城からの令が変わらぬならば、カレらは命を果たし終えるまでそれを続ける。事実、この十年の間、魔黒は忠実に少女の惨殺死体を造り続けてきた。

「なぜ、死ねないのでですか」

だが、その十年間の反復は遂に終焉をみた。惨殺した死体がおぼろげに意志を發したのだ。

意志の発現と記憶活動を開始した少女は、大量の硝子片が憑き鎖さり、血塗れとなった肉体を憂鬱そうに動かすと、再び問うた。

「なぜですか」

「古城の永遠を以ってしても、御身にかけられた呪を破ることができないからだ。貴女の呪は千一の人の死によってつくられている。

その千一の死を清算せぬ限り、貴女が幾度殺されようと、『死』という願望は果たされない」

「そうですか。なら先にその呪を解いてください」

「千と一の死には千と一の死でしか立ち向かえぬ。故に途方もない時を費やすことになるだろう。それでもよいか」

「構いません」

「よからう。これより我は千と一の死を貴女に齎そう」

……こうして、願望は書き換えられた。

名もなき少女の千と一の死の夜は、幕を明けたのだ。

C、

都より遙か西。大河を越えた向こう側。湾に面したその地に、ヘンデルの街はあった。

ヘンデルは貿易都市だ。北と南を占める二つの大海は、波が猛り荒ぶっており、海神の怒りを御せぬ異国の航海術では渡ることができない。それゆえ、唯一穏やかな西の湾に面した一帯は交易の要地となっており、その中でもヘンデルは特に主要な貿易都市だった。

年中活気に満ちたその地は、若者達の理想郷だ。若く、血流の赤々と波打つ頃には誰もが憧れる街。その憧憬のままに市場に引き寄せられる若者は後を絶たないが、その荒波のごとき貿易市場で一商売打つのは、北の大海を渡り切るかのごとき冒険で、ほぼ全ての者が一月もすれば携えていった財産全てを失い、田舎に逃げ帰って行くのであった。

さて、今年で十七歳を迎える少年エインズも、夢を抱き憧れの地ヘンデルを訪れ、社会という辛酸を喉奥にまで嚙下した若者の中の一人だった。

エインズはそれでも上手くやった方だった。夏の始まりにヘンデルに上り、秋の始まるころまで商売は上々だったのだ。それが、たった一度大きな過ちを犯してしまっただがために、ようやく築いた小財産、商売場、果てはヘンデルでの住居まで失うことになったのだ。

B、

「わかった。そのエインズってやつがのたれ死ぬのね。そうでしょクロノ？」

黙って話を聞いていた少女は、突然言葉を発した。

クロノと呼ばれた真黒い十字架は、やれやれと嘆息する。このところ、少女には殺し急ぐきらいがある。そう感じたからだ。

けれど、それも無理はない。五百を越える死の物語を聞かされれば、そうなったとて全くおかしくはないだろう。それも、たとえ彼女が望んでいるとはいえ、このような湿気と陰とカビに満ちた狭苦しい部屋では尚更だ。

クロノは改めて部屋を見渡した。まず、最初に目に入るものはいって、この部屋には具体的な物体などない。在るのは、少女と、闇だけだ。本当につまらない廃屋の一室のような部屋だが、まあそれでもまだ救いはあった。

救いは、真つ白な少女自身だ。少女は、闇の中で唯一存在しているものだった。裸身に、雪肌のように真つ白な薄いドレスだけを身につけ、まだ若く、弾けるような白肌は柔らかな曲線を描いている。両の掌にぼつかりと開いた穴が、木杭で壁に打ち付けられていて、まるで磔のように少女の綺麗な体を固定しているのが、ただ心残りだったが、それも少女自身の望んだこと。杭をはずしたらどうか、というクロノの意見を、少女は、こっちの方が落ち着くからいやだ、の一言で何度も一蹴してきた。そう言われてしまえば、クロノにはもう何も出来ない。とはいえ、それでも十分に少女は美しく、綺麗だったので、クロノは満足だった。

なにより、クロノは少女の瞳が好きだったのだ。色の異なる両目、自身を見つめてくれる両目。視力はないようだが、クロノには、その瞳が自身に向けられたものであるという確信があった。だから、その両目が覗けさえすれば、たとえ木杭で磔にされていようと、クロノにはさほど関係がなかったのである。

「クロノ、どうしたの。早く殺して頂戴。そのエドワードとかいうやつ」

「エドワードじゃない、エインズだ。そう急かすな。ルフ、呪を解くためには濃厚な死物語が必要だっていったらどう？ それに、

物語は段を踏まなければ輿の醒めるといふもんさ。わかってるんだろ、おりこうさん？」

「はいはい。わかってますよ。でも、そーゆー回りくどいのは好みじゃないのよ。さっさと殺してくれればいいのに。ま、いいわ。さ、続きを話して頂戴」

クロノは、少女　ルフの瞳を覗き込むと、再びやれやれとため息をつき、続きを紡ぎ始めた。

C、

エインズは、途方に暮れていた。

自身を一文無しに追い込んだヘンデルの市場でのことは、思い出すだけで怒りがふつふつとこみ上げてきたが、それでもなんとか忘れようと努力をしていた。怒ったところでやり直せるわけではない、などという諦めを抱けるほどエインズは達観してはいなかったが、秋の間に実家に帰らなければならぬという現実が、彼の憤怒を押し留めていた。冬になれば雪で街道が閉ざされる。そうなる前に、なんとか実家に戻らなければ、家も金もない自分は野垂れ死にだ。そう思うと、いてもたってもいられず、今すぐにも街道を東へ下りたいところではあったが、相応の旅費がない。ゆえに、その旅費を貯めるため、エインズは今日も日雇いのバイトを探していた。されど、使い人は皆奴隷で済ませるようなこの市場で、それも都合の良いバイトが転がっているはずもなく、エインズはなんの成果も得られぬまま、既に五日を無駄に過ごしていた。それも、まるで飲まず喰わずのままだ。

流石に、心身ともに限界が来ていたのだろう。エインズは、その日もバイトを見つけられぬまま、遂に路地裏に倒れた。

B、

「ようやく死んだわ！ あー長かった」

「ルフ。あいにくとこの物語はこれからだ」

「えー。クロノのケチ。そこで行き倒れにさせとけばいいのよ。そうすれば死ぬでしょう？ その……ベルゼブブとかいう街のヒトたち、きつと誰も助けてなんかくれないだろうし」

「街の名はヘンデルだ。ルフはどうしてそう思うんだい？」

「金の亡者の街だもの。みんなお金のことで、脳みそいっぱい」

「その通りだ。しかしね、ルフ。物語つてのは例外があるから生まれるんだ。普通のことを描いただけではただの叙事詩に過ぎない。物語ってというのは、そこに毛の一本でも生やさねばならないのだ。でなければ、ロマンチックに欠けるだろ？」

C、

エインズが目を覚まし、まず視界に入ったのは煌々と燃える暖炉だった。

かけられていた毛布に体を温められるのと同時に、薪の燃焼する独特な臭みが、心を暖める。居心地のよい、覚えのないその場所は、三日間の徒労とあいまって、そこが噂に聞く天国なのだと彼に錯覚させた。

自分は死んだのだ。

エインズは、その事を自分でも驚くほどすんなりと受け入れた。彼は、ヘンデルの街で倒れたのなら、救いなど何処にもないことを人並み以上には知っていたし、それに、こうして実際に天国へとやって来てみて、そこが想像していたのと同じような楽園だったも

のだから、いとも簡単に受け入れることが出来たのだ。贅沢過ぎず、素朴で、ただただあたたかな楽園。エインズの描く天国はそういうところだ。

どうせ死んでしまったのならもう少しゆっくりしようと考え、彼は再び毛布をかぶりなおす。すると、きいと、軋むような音がして、饅えた臭いが鼻腔をツンと突いた。

「おや、お目覚めか」

声のした方に目を向けると、そこには背の高い、ちょうどエインズの姉くらい年の女性がいた。女性は、木で出来たカタチの歪んだ器を両手で支えながら、エインズの方へと歩んでくる。おそらくなにかの女神だろうとエインズは納得し、彼女を観察しているうちに、先程より鼻腔をまさぐっていた臭いの正体を、女神の持つ木の器の中に看破した。

「なんですか、それは」

「これかい？ これは熱を冷ます強力な塗り薬だ。ニガヨモギと啄木鳥の眼、雌鳥の鶏冠をあたたためながらどろどろになるまで煮込む随分と臭いけどね。これが効くのさ」

「熱を冷ます？ ここでも風邪はひくのですか？」

「そりゃひくさ。あんたおかしなことをいうねえ。まさかぶったおれた時の衝撃でおかしくなっちゃったのかい？」

「あ、いいえ。決してそういうわけでは。ただ、天国も案外と普通のところというか……なにも変わらないなあって思ってる」

「天国？ あんたここが天国だって？」

「ええ。死んだものは天国へと行けるのだと聞いております」

死者のみが辿り付ける楽園。彼の故郷では、死を恐れていた反面、誰もが死後の世界に、少なからぬ期待を抱いていた。エインズも、素朴な理想ではあったが、期待していたという意味ではその中の一人だ。

女性は、彼の言葉を聞くと、その妄信ぶりがおかしかったのか、突然大声をあげて笑った。

「どうして笑うのです？」

エインズは不機嫌になつて咎める。いくら相手が女神とはいへ、失礼なことは咎めなければならぬという、若い気概のようなものに、彼は満ち溢れていた。だが、その言葉もろくに聞かず、女性は笑い転げる。

ついにエインズの堪忍袋の緒が切れたという段になつて、ようやく女性は抱腹絶倒の弁解を述べた。

「いや、悪かつたよ。いきなり笑つたりして。ひーおなかないたい」

「一体なんなんですか。全く」

「いやさ。君が大真面目な顔をして天国なんていうからおかしくつて。あのね、ここは天国じゃないし、だいたい君は死んでない。保証出来るわよ。だって私が路地裏にぶつ倒れていた君を助けた張本人なんだもの」

Ｃ、

「へえ。それは大変だつたねえ」

「大変なんてものじゃない。あの男にはまったく一泡吹かせられませんでしたよ」

「まあそういう街さ、ここは。若者が簡単に成り上がれるところじゃない。それで君は一文無しで三日も何をしてたんだい？ 最近はやりの仇打ちでもするつもりだったのかい？」

「復讐なんてしない。確かに東では仇打ちが流行っていますが、そんなことしたつて、何かがかえってくるわけでもない。一時の怒りに身を任せるなんて愚の骨頂です」

「随分と遅しいことを言うんだね。復讐じゃないとしたら、なにをしてたんだい？」

「旅費を集めていたのです。冬が来る前になんとしても故郷に帰ら

なければならぬ。そのために日雇いの仕事を探していたんだが」「あいにくと日雇いはなかなかないね、ここには。細々とした仕事はみんな奴隷が片付けちまうよ。奴隷なら山ほどつれて来られるからね」

「そのようですね。それじゃ、僕はこの辺でおいとまします。助けていただいて、ありがとうございます」

「おいとまって、あんた一体何をやる気だい？」

「冬がもう近づいています。だから早いところ仕事を見つけないと。助けてもらった上に食事までごちそうしてもらってなんのお礼も出来ないのは心苦しいのですが、時間も金も無い身のため、何も出来ません。申し訳ない」

「申し訳ないって、そういうわけにはいかないね。命まで救ってやったんだから、いくらか礼をするのがルールってもんさ」

「だから申し訳ない。あいにくと何もすることが」

「あんた、一週間ほどうちで働いていかないか。こないだ奴隷が青眼病でくたばっちゃってね。人手が足りなくて困ってたんだ。もちろん給料もいくらか払うよ？ そうだなあ、あんたの故郷までの旅費くらいは払えると思うのだが」

「」

「なんだい、おまえは礼も出来ない恥知らずかい？」

「いや すまない。だが本当にいいのか？」

「あんたに選択権はないよ。助けてもらったのなら礼はきちんとする。それがヘンドルの街での等価交換のルールだ。さ、早速だがあんたの食べたその食器。洗ってくれ」

「ああ、喜んで」

B

「どうした、ルフ？」

クロノは、ルフがぶすつと頬を膨らませたのをみとめ、話を一旦区切った。ルフは随分と感情表現の豊かな子だ。クロノは、ルフの示すジェスチャーの、一つ一つが示す意味を粗方把握していた。頬を膨らませる行為は、世の中の不条理に苛立っている、という意思表示。さて、ルフはこの心温まる物語に、どんな文句を垂れてみせるのであるうか。

「偽善者」

「いちゃもんは一言だ。その言葉は、クロノの胸にシンと雪を積もらせた。」

「クロノの話っていいーつつも変人ばかり出てくるのね。ヘンリーなんていうシビアな街で、行き倒れの人を助けてあげて、ごちそうまでふるまったあげく、仕事まで斡旋してくれるなんて。そんな人間、偽者よ。そうじゃなくても変人だわ！ヘン・ジン・ン！ねえクロノ、この話もう終わりにしよう？私気持ち悪くなってきちゃった」

「街の名はヘンデルだ。ルフ、終わりにしようと言われても、物語は千一しか選択できない。一つでも途中でやめてしまったら呪を解くことが出来なく」

「わかってるわよ。私何がいたいかっていうとね。クロノはそういうの気持ち悪くないかってことなの。人間って言うのは、もし他人を殺してしまったとしても、それが自分のためなら言い訳ばかりポンポン思いつくイキモノなのに、クロノの物語に出てくるのってだいたい人に施したがる変人ばかりでしょ？本当に頭がおかしいのかと思っちゃうわ。それとも私の頭がおかしいの？ねえ、クロノ、教えて？」

「ルフはなにもおかしくない。まあ、そんなに機嫌を損ねず最後まで聞いてくれ。この物語はわりにルフ好みなんだ。きちんと最後まで聞いてくれればの話だが」

「……わかりました。続けて頂戴」

ルフは、渋々といった様子でうなずいた。

C、

エインズがその家で働きはじめてから三日が経過した。その日は、家の主人が市から帰ってくるということで、豪華な食事を用意するのだそうだ。この家は市からは少しばかり遠い場所に位置しており、忙しい主人は日をあけて帰宅するのだという。現在家に残っているのは、主人の娘であるしつかり者の彼女だけなので、さほど心配もないのだらう。女とはいえ、彼女ほど逞しい女性はそういない。

「父親がたまに帰ってくるとはいえ、女一人で暮らすのは何かと大変ではないですか。よし、玉ねぎ切り終わった」

けれど、エインズにはそんな彼女をすら気遣う心配りがあった。

「次はトマトをスライスして、オイルに浸しておいて。一人でも、特に大変じゃないさ。お金は父が儲けてくる分です十分だし」

「金銭面に関しては確かに充足してるみたいだな。というか、随分と潤っているように感じる。主人はなかなか商売上手のようですね」

「ああ、自慢の父親だよ。もつとも、何を取り扱っているのかさえ教えてくれれば、よりいいんだがね」

「父の仕事について詳しくは知らないのですか」

「あいにくとね。まあ生活費さえ充足していれば、私には関係ないよ。よし、エインズ。もう少ししたら火を使うから、準備しといてくれ」

C、

家の主人は大柄で派手な男だった。身の丈は軽く二メートルを越

え、胴回りは樽のような大男だ。それでも決して太っているというわけではなく、異常なまでの筋肉質がその異様を成しているようだということ、服越しにでも見て取れた。巨体の上にちよこんと乗っかっている顔のパーツは、どれも不細工だったが、その中でも特に目を惹くのが目と鼻だ。鼻はまるで押し花のようにぺちやりと潰れていて、およそ顔の半分を覆っている。目は、男の肉体の中で唯一小さいパーツであり、むしろそれは普通と比較しても小さすぎるほどで、白目を差し置いて瞳のみが露呈している、まるでビー玉のようだった。

その容姿を一言で言えば、「ひとたび見たら忘れない」。

その上、もしその男が自身を破滅に追い込んだ人物その人であったりしたならば、たとえ地獄に墮ちようと、容姿の極細部にわたるまで鮮やかに思い出せるに違いない。現に、エインズが持つ記憶と、男は寸分違わぬイメージでそこに存在している。

家の主人は、エインズに破滅を齎した男その人だった。

「はっはっは。いやあ、それはとんだ災難でしたな。ヘンドルの街は物騒なもので、ちょうど貴方くらいの年の若造は狙われやすいんですわ。おまけにその手の詐欺は挨拶がわりでしてね、ここではもう有名すぎて茶番の一つなんですよ。ときたま貴方みたいにころっとはまっちゃうものもいるみたいなんですけどね。それにしても今日の料理はいつもにまして旨いな。一週間と言わずにずっとここでバイトをしていつてはどうかね？」

大男はその巨体からは思わせぬほどの美声を張り上げて食卓を賑わせた。あるときエインズを乗せた口車は健在で、場を巧みに盛り上げている。ヘンドルの商人の持つ力を、エインズは改めて思い知った。

「いいえ、そういうわけにはいかないのです。故郷では両親が待っているのです。ここどころ手紙もろくに書いていないので、不審に思われていると思いますから」

エインズは、ひどい葛藤に胸を悩ましていた。自身を破産させた

男に対する怒りは当然のごとくある。どころか、ぐらぐらと煮え立つ火山のマグマのように、憤怒の炎は噴火寸前だ。彼が怒りを撒き散らさないのは、命の恩人である彼女の前であるからだ。これほどにまでお世話になった彼女を困らせるのは気がひける。また、三日前に自身が述べた、復讐をしても何かがかえってくるわけでもない、一時の怒りに身を任せるのは愚の骨頂だ、という言葉が、彼の衝動を抑制していた。

「それはいけない。ペンと紙くらい貸してあげるから、食事を終えたらすぐに家族に消息を伝えなさい。親を心配させるものではないよ」

さらにいえば、この男の態度も彼がいまいち怒りをぶつけられずにいる原因である。まるで初めて会ったかのような、ただの気のいい人のような対応。彼を貶めた時とは百八十度違うその態度は、彼の方が誤っているのではないかと思わせるほどに、記憶から逸していた。

C、

食卓で会話を続けるうち、やがて、エインズの中でぐつぐつと茹っていた葛藤がおさまる。彼は、過去の因縁をなんとか自身の中に押しこみ、明日を生きることを決めたのだ。

B

「もう……クロノなんか嫌いになっちゃうんだから
眉をしかめて、ふくれつつら。どうやら、ルフはご機嫌斜めだよ
うだ。」

「ルフ、不機嫌なのは分かるがここまで来たんだ。最後まで聞いて

くれ。それと、目をつぶるのはやめるんだ」

「なぜなの、クロノ？ どうせなにもみえないんだもの。つぶって
いたって開けていたって、なにも変わらないわ」

「変わるさ。俺はルフの目が見たい」

クロノの言葉に、渋タルフは目蓋を開いた。暗雲が垂れ込めてい
るような、濁った双眸。妖しげに輝くそれが、クロノには何よりも
眩しかった。

「よし、それでは最後の節を語るとしよう。ルフ、しっかりと聞く
んだ、わかっているな。エインズは、男に勧められるままに両親へ
の手紙を」

C、

エインズは、男に勧められるままに両親への手紙を書き終えた。

封筒に宛先を記す腕がふるえた。宛名には父と母の名を流暢にし
るしていく。二人の名を書き終えたとき、エインズはふと右の内ポ
ケットに潜ませておいたものを取り出した。

それは家族の絵だった。両親と二人の子供が描かれている。貧し
いが、あたたかな家庭の絵。子供は男と女が一人ずつ。金の髪の少
年と、青い目の少女。エインズはしばらく眺めたあと、絵を裏がえ
す。そこには、懐かしい筆跡で「エマ」と書かれていた。

エインズはしばらくそのまま静止した。まるで呼吸すらとめてい
るかのように、ぴくりとも動かない。

やがて新しい封筒を一枚手に取ると、住所を再びしるしはじめた。
念じるようにゆっくりと、宛名には「エマ」とだけ書く。書き終え
ると、古い封筒を屑かごに放り込み、新しい封筒に使せんをいれ、
しっかりと封をした。

エインズは封筒を先ほどの絵とともに右の内ポケットに戻し、今
度は左の内ポケットに手を伸ばす。ポケットの中に忍ばせたものを

しっかりと握りしめる。ずっしりとした手応え。エインズの瞳に、青い炎のような狂気が一瞬間揺らめいた。

C、

「ふむ。君は私が君を破産に追い込んだといっているのかね？ はっはっは、大正解だ。だってそうだろう？ ヘンドルの市場を荒立てているのは私たち大商人だ。若者の寄り付く居場所すらなくしているのは私たちの所業だ。そこに言い訳の余地はないよ。おまけに、あの程度の詐欺なら、私たちは挨拶代わりに山ほどこなしている。時に君のような血の気が多い若者が引つかかるが、それもいちいち覚えてはいないさ。だから君を破産させたのは私だと言われても、私はそれを否定することができない。だからこうして君の殺しを甘んじて受け入れているわけだ。これも何かの運命だろうってね。さて、どうだったかい、ヘンドルの街は。なかなか難易度が高かったろう？ ここを攻略するには、全てを断たなければならぬ。金に対する欲望から、性欲や愛欲、憎しみや喜びへの執着。それら全てを放棄して日々を刹那的に生きなければならぬ。それは本当に幸せなのか、どうか。さて、幸せなんて蓄える感慨は遠い昔に断ってしまったから、私にはなんともわからないなあ。まあ、そんなことは今さら君が知ったって仕方のないことだろう？ 残念だが、君はここでゲームオーバーのようだ。どうぞ、ご自由に死ぬがいいよ」

</C complete>

B、

「五百五十二話目の死物語はこれでおしまいだ。どうだったかい、ルフ？」

「そうね……もっと人間らしい人間を登場させても良かったと思うわ。なんていうか私、ちょっとアテられちゃった」

「というと？」

「まず一番いけ好かないのは偽善者の女でしょ。彼女はどうみても偽者だもの。死物語（私達の夜）には必要のない存在よ。次は商人の大男だわ。なにもかも断つことで成功するって、そんなの無理に決まっているじゃない。欲望あつてこそその人間だもの。もし不能で不感だったとして、性欲とか喜怒哀楽を捨てられたとしても、生への執着は足枷となつてどこまでもくっついてくるでしょ。だからそんなイカレポンチなことを死に際で平然と言つてのけるこの男は、どうみてもホラ吹きよ。そして最後にエインズ。最後の衝動は随分と上出来な人間だったと思うけど、自分の敵くらい出会った瞬間に殺すべきでしょ。そもそも陥れられた時点で殺しておくべきなのに、それが出来ないなんて出来損ない。ほら、みんな変人ばかり。偽善者にホラ吹きに出来損ない。ねえ、クロノ、私間違つてる？」

「いや、ルフは間違つていない。だが、そういう人間がいないのなら、物語は面白みにかけるだろう」

「そうなの？　じゃ、物語を面白くするために必死に変人ばかり集めるのね。でもそれって変じゃない？　百三十五話目のとき、本を読んで泣く人が出てきたでしょ？　あのときクロノは、物語には感情移入するものだって言っていたよね。でも、変人ばかり出てくるんじゃ、なかなか感情移入できないと思うの」

「ああ、そうかもしれないな。少なくともルフには無理だろう。それでは、今宵はこれまで。五百五十三夜目でまた会おう」

「待つて、クロノ」

「なんだい？」

「えつとね……その、ひとつだけお願いがあるの。いい？」

「ああ、なんでも言ってみるといい」
「うん。あのね……次は、もうちょっと惨たらしい物語がいいなあ」
「」
「もうちょっとでいいの。もうちょっとだけ。ねえ、クロノ？ だめ？」
「ああ わかった、善処しよう。ではまた明日。おやすみ、ルフ」
「ええ、おやすみなさい、クロノ。また明日」

五百五

十二夜目、明。

「物語は一つなのに、死体は二つ。……ねえ、殺されたのはどっち？」

< / B c o m p l e t e >

【SCENARIO：E7G】

E、

永遠の古城、ステルヴェン。永遠という神秘で中身を満たしたそれは、まさに永遠の器だ。

永遠は繰り返す。人の叡智と永遠さえあれば、人類はどれだけでも先に進んでいける。それは、まごうことなき史実であり、古城の存在から此方、一度たりとも翻ることのない定理であった。

だが、アンファンヌの贄はそれを覆した。

城に選ばれた少女。朱い色の干からびた少女は、願望の成就に失敗した。

永遠が存在する以上、成し遂げられぬことはない。人間が失敗するのは、有限の時に阻まれるからだ。時間をかければ、どんな望みだつて解決する。

間違いない。人はそうして歴史を築いてきた。

されど、例外は存在する。人類の進歩の歴史を否定するもの。伝統、惰性、古来より伝わる文化、人々の懐古と固執。破壊と創造の歴史、永遠をもともせぬ犠牲^{カコノイブツ}への妄念。少女に与えられた呪とは、まさしくそれらの化身であり、古城にとって唯一の盲点。人類史を肯定するべく生まれた、人間史を否定する存在。

永遠を自然のままになどしておかず、手を加え、最大限活用するのは人間史であり、それを否定する少女の存在。さらに言えば呪が永遠を淘汰するのは理^リである。

実に皮肉なことだ。永遠を謳歌したい人間はごまんという。にも関わらず、古城が選んだのは、永遠をどぶ川に葬る名前のない少女。これが皮肉でなければなんだろう。

^{ステルヴェン}古城は選定を誤らない。選ばれし者には相応の意味がある。たとえ魔閻^{まぐろ}で構成されていようと、その意志^{ベクトル}には意味が宿る。

ならばステルヴェンは、一体なにを少女に見出したというのだ。

G、八百八十三夜目

ここ八十日余りの間、少女の監獄には雨が降り続けている。

監獄で起きる事柄は全て少女の望みだ。

ならば、この救いの無い反復には、何か意味があるのだろうか。

毎日降り続けるそれを全身に浴びて、少女は鬱屈そうに笑うのだ。

「今日もまた失敗しちゃった」

G、

「七十五点。割といい話だったわ」

魔閻まぐろい十字架　クロノが今夜分の物語をし終わると、ルフは微笑んだ。

恐ろしく下手糞な笑みだったが、それは仕方ないだろう。ルフは人間の笑顔というものを一度たりともみたことがなく、物語の中から得た知識を総動員し、想像に基づいて笑ってみせているに過ぎない。憎悪や嗜虐のような単純な表情は、驚くほど器用につくってみせるのだが、笑うことだけは上手く出来なかった。

「ああ、それはよかった。そう言って貰えると、選びがいもあるというものだ」

「でもね、ちょっと気に食わないところがあって。デューペルトの

正直者なところなんだけど」

「正直者？ デューペルトは一度逃がす機会を与えたように見せかけて、結局絶対に逃げられないよう捕縛したんだ。彼は詐欺師の類ではないか。ルフはどうしてそう思うんだい？」

「甘いよ。彼は自分を残虐の化身だと驕るあまり、自分に陶醉してしまっているの。つまりどういことかという、頭が冴えていないのよ。きつと右耳から脳味噌を嚙られても気がつかないくらいに。彼は自分を残虐たらしめようとすることに右脳の半分を割いている。自分を偽るのに必死なのよ。彼が王位についているってのはそういうことでしょ。奔放に生きている証を立てる為に、様々な不道德をしてみせて、自分を騙るの。世間の人々から暴虐王と呼ばれるために。でもそれって虚しいでしょ？ 道徳に適わないことは決して人に認められるための手段とは成り得ない。暴虐というのは本来、自分のためだけに用いられるものなのだから。人に認められないなら、善行を積みばいいじゃない。それが出来ないから、あえて枠から外れてみせるっていうの？ まるで馬鹿ね。出来ないのなら出来ないらしく、負けを認めればいいのに。だいたい暴虐王なんて名前、格好悪いって気がつかないのかしら」

「いやしかしルフ。君の言うことは最もだが、それでは正直者ではなく騙り屋だ。立派な嘘つきだろう」

「クロノあのね、正直者っていうのはそういう意味で使ったんじゃないの。人に認めさせるために暴虐を使う者は、やっぱりその本質を知らないものだから、半端なの。言ったでしょう、甘いつて。そういう半端な人間って言うのは、いくら暴虐を尽くしたって、ポロっと正直な面が出てしまうものなのよ。デューペルトの場合はそれが顕著ね」

ルフは淡々と述べる。彼女は自らを偽る人間に厳しい。ルフに言わせれば、弱くて卑屈な人間というのは、救いがないという。

ただ弱いだけであれば、まだいいのだそうだ。そもそも弱い人間の方が圧倒的に多いのだから、弱いことは恥ずべきことではない。

ただ、それを押し隠すべく、卑屈な手段を用いる詭弁の鎧武者達を彼女は嫌っていた。

それゆえに、淡々とした表情は軽蔑の表情。様々なものに様々な感動を返してみせるルフの、皆目興味ないという最高級の侮蔑の表現である。

彼女にとつて塵芥以下の存在を相手に、それでも彼女が自らの意見を述べてみせるのは、せめてもの優しさの発露なのだろう、とクロノは解釈している。

「ルフ、君が言うことが正しいのは分かるが、君らしくもない少々煙に巻いた言い方をするものだな。つまり、彼のどの辺りが正直だと言えるんだい？」

「ふふ。なんだ、クロノったらそんなことも分からないの？ いいわ、教えてあげる。一言で言えば、頭が固いつてことよ。でも一言で言う必要はないからちよつと長く言うわね。つまり」

F、

暴虐王デウーペルトの歴史は、聖なる教えの没落から始まる。

英雄アムンディエルの宗教弾劾により、人々は信仰という捕縛から解き放たれた。教えの不実は白日の下に晒され、主の言葉は意味をなくし、神は存在ごと抹殺された。人は打ち勝つたのだ、と後の書物で彼の活躍を称えている。

されど、当時の教会は国政と癒着し過ぎていた。教えなくして政は行えない。既にそれらは二つで一つの機能と化しており、半身が欠けた以上、今までと同等のシステムを用いては、民衆を戒めることは出来なかった。

神に裏切られた　そう感じた人々は自暴自棄となった。弾劾ののちに訪れたのは、人が人を謳歌する理想郷などではなく、人が人

を騙し、殺め、陥れる終末の世界だったのだ。

その惨状を目の当たりにし、時の王デューペルトは考えた。神は死んだ。ならば、この自分が神に取って代われればいい。身を持たぬ神ですら行えたのだ、自分に出来ぬはずがない、と。

神が驚くほどに強大な権力を持ち、民を貶め、操ったのは、その戒めと救いからだ。人々は神を恐れ、同時に慕っていた。

だがデューペルトに言わせれば、その在り方は至極甘い。慕われるような立場にあるから、裏切ったと罵られるのだ。善人面をしてみせるから、民衆が付け上がるのだ。自己を善の線引きの内側に置こうというその欺瞞こそが、神の敗因だ。

ゆえに、彼は戒めのみを用いた。人は痛みを挫ける。痛みを回避するべく、恐怖を感じる。人間は恐怖の従順な下僕だ。ならば恐怖で支配すればいい。

デューペルトは恐怖そのものになろうとした。恐怖が人間を支配することには、少しの余力も要らない。元からある状態を、そのまま利用しているに過ぎないのだから。

彼は、思いつく限りの残忍非道を試みせた。行われたどの残忍にも理由はない。ただ、支配という意味があるだけだ。

そうして、しばらくの後、デューペルトは残虐王の名を冠す。人々を恐怖におとしいれながらも、危ういバランスで世界には秩序がもたらされた。だが、残虐王の名を得た頃より、彼は残虐に別の意味を見出した。

手段が目的となつてしまった。デューペルトは、残虐王と呼ばれること自体に、意味を見出してしまった。

F、

今夜は、暴虐王デューペルトの行った残虐のうちの一つを語ると

しよつ。

デューペルト王の行った“百日殺し”の噂は疾風を凌駕する速さで都へと伝わり、そのまた三日後には国全土に広まった。人々が彼に付けた名は残虐王。暴虐王の名を冠す以前の彼のその名称は、噂とともに疫病のごとく人々の口耳を伝聞していった。

民衆は震え上がった。既に信心を欠いていたものは言うまでもなく、宗教弾劾が行われてもなお、神の鉄槌に未だ平伏していた者たちまでも、その畏れを残虐王への恐れと成し、王の前に膝を屈した。皮肉なことに、英雄アムンディエルの「民を神に束縛されぬ自由な在り方へ導こう」という意思の元に始まった宗教弾劾は、こうして完成したのだった。

デューペルトは百日殺しを終え、一応の形で国の治まるのをみた。だが、そう悠長に構えてはいられない。放っておけば、民衆を付け上がらせる事になり、再びアムンディエルのような英雄が民への圧力を撤廃しようと立ち上がりかねない。

戒めによる治世には継続的な残虐が必要だ。デューペルトには、残虐王の名の廃れる前に、次の残虐を行使する必要があった。

かといって、百日殺しを再び行うわけにはいくまい。世間は惰性を厭う。人々は新鮮なものを求めている。それは王の残虐性においても当てはまる。それになにより、百日殺しでは危機感リアリティがない。百人の人間を見せしめに百日の月日をかけて甚振るといふのは、残虐性には富むが、百人しか殺さぬため、民衆の一人一人が危険に晒されているという危機感を抱かせにくい。

百日殺しでは、衝撃を与えることを主たる目的とした。結果は、残虐王という名で返ってきている。ならば次は、その名を絶やさぬようにしなければならぬ。

そこでデューペルトは思い至る。罪の重い軽い、さらには事実無実を問わずに投獄してきた哀れな民が、今も西の牢城で怨嗟の声を

上げている。パンを一欠片奪った窃盗犯から冤罪の殺人犯まで、いつの日か見せしめにしようを集めてきた。その報われぬ人々の数は、総勢九千九百九十九名。恐怖政治の道具としては、実に好ましい数だ。

F、

材木店の娘が罪人として宮廷の兵士達に連れ去られたのは、王の万人殺しが発表された翌日だった。

彼女の罪は商売に嘘を用いたこと。与えられた罰は“万人殺しの一番目”。

いくら方便といえど、嘘を付くことは当人にとってみれば後ろめたい事。両親は涙を流し娘の正当性を訴えたがしかし、娘はその背徳の意識から、罪状を拒むことは出来なかった。

王として罪なき者を罰することは出来ない。それでは只の暴漢であり、民の反発を助長することになる。正しい恐怖政治とは、疑わしき者を問答無用で、残虐な手段を用いて死に至らしめること。そうすれば、いかに残忍であろうと民は納得せざるを得ない。

その上、材木店の娘は、宗教弾劾以来異端と扱われるようになった、信者の中の一人だったのだ。罪人と囃し立てるのには実に都合がいい。

F、

王宮に連れて行かれるとすぐに娘は王の間に通された。兵士に両腕をとられ這い蹲る少女の前に、デューペルト王は、深い慈悲を湛えた笑みを向けて王座に君臨していた。

「君は罪人だ。罪人は須らく裁かれるべきである。そのことに異論はあるかね？」

娘は驚いた。彼女のイメージと恐ろしくかけ離れた容かたちで王がそこにいたからだ。残虐王と呼ばれる彼の笑みと優しげな声は、彼女を大きく動揺させ、同時に大きく安心させた。

「異論は……ないです。しかし国王さま……っ」

彼女は口を噤んだ。兵士に腕を捻られ、みしりと肩が軋みをあげたからだ。

しかし王は兵士を制止すると、慈悲深くも発言を許可した。

「言ってみなさい」

「は、はい。私はたった一度嘘をついただけです。……いいえ、確かにそれは罪です、言い逃れは出来ません……けれど、それは死に値するものでしょうか？」

精一杯述べる。再び肩が唸ったが、彼女はなんとか堪えてみせた。

「確かに」

王は腰を深くかけなおし、銀の髭を薬指と親指で摩りながら、ゆつくりと答える。

「君の罪は軽い。殺してしまうには軽すぎる罪だ。そこでわしは考えた」

王が右横後ろにいた兵士に目配せで合図をすると、兵士は後ろの扉へと姿を隠し、黒い箱を持って戻ってきた。王はそれを受け取ると、娘に差し出した。

「君の為にこんなものを用意した。これがなんだかわかるかね？」

「いいえ」

娘は不思議そうに目をくるくる動かしてそれを眺める。王は娘にその箱を渡すと、振ってみなさいと呼びかけた。娘はしばらく黒い箱を見つめると、上下に揺らしたり、横に揺らしたり、耳をあてて揺らしてみせた。黒く、すべすべとしたその箱は、見た目より全然軽く、娘の細い腕でも軽々と振ることが出来た。

「どうかね、それが一体何か分かったかね？」

「んと……ころころ音がします、けれど、それ以外はわかりません」
娘は申し訳なさそうに俯く。王は箱を取り上げると、ゆっくりと説明し始めた。

「これはアルテイルの黒箱といってね、罪人を裁く箱なんだよ。君が箱の上の穴から手を差し入れたとする。君がもし正しいならば箱は白く輝き、間違っているのなら黒いままだ。この箱を用いて君が死刑に値するかを確認しようではないか。問題はあるかね？」

王はにんまりと笑った。娘は怯えて答える。

「いいえ、問題はありません……ですが王様、正しい者の手をその箱に差し入れると、どうして白く輝くのでしょうか？ 私、そのあたりがわかりませんと、安心できないのです」

「ほう、理由が必要かね。ならば、その質問にはこう答えておこう。神のみぞ知る、とな。君は敬虔な信者だという話だから」

ここにきて、娘は寒気を覚えた。あたたかな笑み、ゆつたりとした声音、それらが作り出す王の幻影。背筋の凍る薄ら寒さに娘は落ち着こうと努め、幻影を振り払い、王の目を見据えた。その眼光は、自身が虫けらであるかのように、冷徹な光を放って、娘を差している。

娘は冷光に屈して俯いた。しかし王は、それを許さない。

「なにか、言いたいことがあるようだね。言ってみなさい」

「……いいえ、ありません……あっ」

娘の両腕を掴んでいた兵士が腕を捻る。血の抜けた、感覚を失った両腕が捻られ、間接が唸る。王はあたたかな笑みを崩さない。娘は、自身が王の享樂のために拷問されていることに、ようやく気が付いた。けれど、答えぬわけにもいかず、恐る恐る言葉を紡ぐ。

「……か、神は死にました。ですから、そのような黒箱の不思議が神の力だといいますが、いまや誰も信じるものはありません……
王様」

娘は必死になって述べる。その言葉は、王を大いに喜ばせた。
「おお、これは驚いた。君は敬虔な信者だったのではないのか」

「……弾効が行われ、教会はその蔵を明かし、教皇は民衆に首を吊るされました。免罪符の意味は失われ、神の鉄槌は効果をなくしました。主の裏切りを目前にして、どうして信じていられますよう……」

「というと、君は信者でもなんでもないのだな。これはなんとも愉快だ。しかし……不思議な話だな。そこまで気づいていながら、どうして君は主を信じ続けたのだ」

「……救いが欲しかったのです。この世の罪を禊ぐ救いが」

その言葉を聞いて、王はわずかに面食らったのか、目を見開いた。「妄信すれば、救われるのか」

「いくらかは。……信じていられれば、いくらかは強く日々を営めます。たとえそれが偽りだとしても、目を閉じて信じれば、なんとか信じていられます」

「よかるう。では、神に祈るがよい。目を閉じて、罪を禊いでもらうがよい。そして妄信の結果を黒箱で確かめよう」

王は大げさに言ってみせ、兵士に合図して、黒箱を娘の前に差し出させた。

「娘よ、それではこの黒箱にその腕を差し入れなさい。だがその前に、一つだけ教えてやるう、救いが欲しかったなら、この残虐王に救いを請うべきだった。救いを与えるものが神だというなら、私が神として恐怖という救いを与えよう。教えとはつまり秩序であり、救いとは平和だ。神は死んだのではない、摩り替わったのだ。今の神は私なんだよ、お嬢さん。君の考え方を用いるのならね」

< F / c o m p l e t e >

さて、名前のない少女による、解剖シヨウの始まりです。

「彼の頭が硬いというのはつまりね、クロノこういうことなのよ。しっかりと聞いていてね。デウーペルトは娘に黒箱を差し出したでしよう？ そのときに彼はなんて言ったかしら？ 箱に手を差し入れて、白く輝いたのなら罪はなく、黒いままだったら罪人だって言ったのよね。都の人たちは、このことをなんて評価したかしら。『残虐王の名に相応しい酷いことだ』と言ったことでしょうね。なぜって、それはつまり クロノも分かっているとは思うけど、それでもあえて言ってみせるわね つまり、この黒箱が普通に考えて白く輝くはずはなく、デウーペルトが、そんなありもしないことを、唯一死を免れる方法として提示したからでしょ。でもね、本当のデウーペルトの狙いは他にあったのよ。さっきクロノも言ったように、一度救ってみせるかのようにみせて、決して逃れられぬ手段を提示する残虐性を、彼は演出しようと思ったわけ。けれど、残念なことに彼の目論見はずれたわね。都の人々は、最後の黒箱の理不尽の方ばかりに目がいつてしまったのだから。どうしてそんなことになったかというと、そこがデウーペルトの甘さなの。彼は、中途半端な残虐しか行えないのよ。なぜって、自分の在り方を確かめるために彼は残虐を行うのよ。そんな人が、本当に残忍な行為を出来るはずがないじゃない。そういう人っていうのは、どんなにあがいても絶対に限界があって、最後の最後で正直者になってしまう偽者なの。残虐王の名に見入ってしまったのが彼の運の尽きね。彼がまだ生きているのかどうかは知らないけど、このまま続けたら絶対にどこかで失敗するわ。彼は、神に対してその在り方は甘いつて言っているけど、私に言わせれば彼のあり方も十分甘い。具体的に言つとどこが甘いかというと、自分で残虐王の名を自称してしまうところよ。

恐怖そのものになるのなら、残虐王の名に固執するべきではないわ。民衆が呼ぶだけならまだしも、自分でその名を使っちゃダメよ。それじゃ神となんにも変わらない。だって、そんな名前偶像なのよ。自分がその名前に相応しいように演技をするのは、神の名前を用いて演技をする教会と、なんにも変わらないでしょう？ あるのは、十字架を信仰させるか、残虐王という名を信仰させるか、その違い。それだけね。で、そろそろ話を戻すわね。どうして都の人々が黒箱の理不尽にばかり目を向けてしまったか。もしデューペルトが甘くなかったのなら、一体どうしていたはずだったか。簡単よ。嘘を吐けば良かったの。箱が白く輝いたのなら罪人で死刑だけど、黒いままだったら君は救われるだろうって言えばいいのよ。そして娘に手を差し込ませるでしょう？ 当然、箱は黒いままだわ。それで娘が救われたと思い、神に再び感謝しようとしたところで、残念でした、さようならって言うの。本当の残虐王にとっては、箱の選定なんて関係ないのよ。あくまで彼の残虐を演出する材料に過ぎないのだからね。だったら、箱の意味に拘らないで、箱の演出する恐怖にこだわらないと。ね？ ほら、こうすれば都の人々は『一度救ってみせるかのようにみせて、決して逃がさない残虐性』に注目することになるわけでしょう？ 本当の恐怖というのはこういうことなのよ。ねえ、クロノ、わかった？」

「ああ、実にわかりやすい説明だった。ちなみにルフだったら、宗教のないこの国をどう治めるのかな？」

「そうね……それは難しい課題だわ。でも、恐怖じゃ絶対に治めることなんてできないと思う。」

ルフはそこで、一瞬間だけ俯いて考え込み、

「なんだかんだいって、恐怖じゃ人は支配出来ないもの。人は恐怖に屈するけど、同時に反発するでしょ？ だから、恐怖じゃダメなの。それに、暴虐を尽くして治めるなんて、格好悪いわ。勘違いしちゃダメ。人を小ばかにして、斜に構えて格好いいと思っている。そんなのは馬鹿な人のすること」

「ルフは相変わらず手厳しいな」

「というか、英雄のインツバインだっけ？ 宗教弾劾なんて格好つけちゃって、こいつの方がよっぽど残虐王より性質が悪いわよ。

人々がすがってきたものをぶちこわしておいて、それで代わりも残さずにさよならって。いい、クロノ？ 人間っていうのは根本的に盲目なのよ。光がなければ歩いて行けない。光がなければ歩き方もわからない。弱い生き物なの。それは本当に致命的に。自分の弱さをもつと弱い他人に塗りたくって生きていくしかない生き物なのよ。そんな人間でも神様っていう光があったから、それまで薄目分の世界がみえてた。それをまた真つ暗闇に叩きこんでにおいて宗教弾劾？ 笑わせるんじゃないわよ」

「英雄の名はアムンディエルだ」

「……」

ルフはむっつりと黙りこむ。いつになくルフの気が立っているのをクロノは感じた。

「もしルフがアムンディエルだったら、どうする？」

「バカな質問ね。光を与えるの。『光あれ』なのよ。いつでも光あれから始まるの。つまり、まぶた瞼を薄目分開く勇気をあげるのよ。こんな薄汚い世の中でも、薄目でみてりゃたまには綺麗にみえることもあるのでしょ」

名前のない少女は吐き捨てるように言った。

自身を破棄ステた世界を、綺麗と表現した。

その虚うつろのような瞳で。

その空うつろのような瞳で。

「どう？ クロノわたし間違ってる？」

「いや ルフは間違っていないさ」

その返答に、てへ、と微笑み、ルフは舌を出す。

恐ろしいほど下手な笑顔。

「たまには そんなのもいいだろう」

けれどそれは、なによりも白く輝いた笑顔だった。

八百八十三夜目・了

E 、

呪の儀式は七日の磔を終えてようやく遂げる。少女の死に必要なのは儀式の完遂であり、それ以外の殺戮パターンは受け付けない。七日間を待たずして古城へと連れてこられた今、少女に死は与えられない。

されど、少女は死を願いつける。城はその願望を果たすべく、今日もまた、少女を殺し続ける。

それは、救いのない螺旋。誰も救えぬ、少女の運命。

ゆえに、少女は願いつける。

< E / complete >

G 、

十字架が少女の監獄を去ると、唐突に天井に現れたステンドグラスがバリリと割れた。

壊れた破片となったそれらは、磔になった少女に、ザクザクザクと突き刺さっていく。少女の白い皮膚は悉く咲き乱れ、赤い花弁を迸らせた。

ここ八十日余りの間、少女の監獄には雨が降り続けている。
監獄で起きる事柄は全て少女の望みだ。

ならば、この救いの無い反復には、何か意味があるのだろうか。

……意味などない。あるはずがない。少女は、ただ救ってもらいたかっただけなのだから。

そうして毎日降り続ける赤い雨それを全身に浴びて、少女は鬱屈それそうに笑った。

「今日もまた失敗しちゃった」

< G / c o m p l e t e >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1443q/>

千夜一夜死物語【The Death of One Thousand and One Nights】

2011年1月16日01時53分発行